



京都の社寺林や庭園の多様な生きものを紹介

京都の社寺と 生物多様性

第一号

渉成園
上賀茂神社



東本願寺・渉成園

東本願寺

東本願寺は、正式名称を「真宗本願」といい、浄土真宗「真宗大谷派」の本山です。境内には大きな二つのお堂があります。北側にある御影堂には宗祖・親鸞聖人の御真影（木像）を、南側にある阿弥陀堂には御本尊の阿弥陀如来を安置しています。親鸞聖人のご後、聖人を慕う多くの人々によって、聖人墳墓の地に御真影を安置する廟堂が建てられました。これが本願寺の始まりです。

一六〇二（慶長七）年、東本願寺第12代教如上人は、徳川家康より京都烏丸の土地の寄進を受け、東本願寺を創立しました。江戸時代には、四度の火災に遭い、現在のお堂は一八九五（明治二八）年に再建されたものです。



御影堂



阿弥陀堂

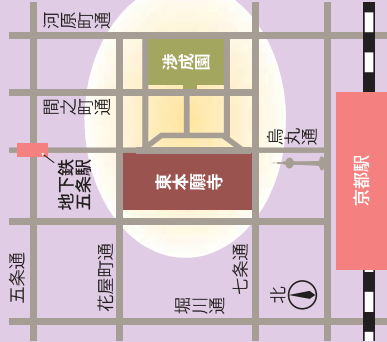
渉成園

渉成園は、池泉回遊式庭園（日本庭園の形式のひとつで、池とその周辺を回遊して鑑賞する庭園）で、東本願寺の飛地境内地です。一六四二（寛永十八）年に三代将軍・徳川家光から当地（約一万坪）が寄進され、石川丈山（祿書や築庭にも優れた江戸前期の武士・漢詩人の趣向を取り入れた作庭がなされました。園内の諸殿は一八五八（安政五年）、一八六四（元治元年）の二度にわたって焼失。現在の諸殿は江戸末期、昭和期に再建されたものです。

庭園には四季折々の草木の花が咲き、植物



渉成園



渉成園の参観情報

- 庭園施設の維持・保全のための
庭園維持寄付金
参観者一人につき 500 円
(高校生以下は 250 円) 以上
- 500 円以上納めた方には、
「渉成園ガイドブック」を贈呈

もくじ

01

東本願寺・渉成園

02

渉成園生きもののマップ

04

東本願寺と環境を考える
市民プロジェクト

05

賀茂別雷神社（上賀茂神社）

06

上賀茂神社生きもののマップ

08

葵プロジェクトの取組について



平安以前からの清浄な境内には、大神の鎮まりまじり国司に指定された本殿を中心に、同じく国司の権威と国の重要文化財の多数の社殿を配する賀茂遍りの作木いこもじ、5月15日の賀茂祭ほか、年間七十数回もの神事が現在まで連続と継承され、平成6年12月にはこうした先人たちの積みなり努力の結晶として、境内全域23万坪が世界文化遺産に登録され広く認知されるに至りました。



賀茂別雷神社（上賀茂神社）

賀茂別雷神社は、神代の君、秀峰神⁵山に御祭神、賀茂別雷大神が御降臨されたことが起源であるといわれており、六七八年に現在の社殿の基が造営され、現在では農耕守護・凶除開運・電気産業守護の御神徳により皇室ほかより多くの崇敬者に尊崇され、「上賀茂神社」として慕われる神社です。



賀茂祭（葵祭）



フタバアイオイ（に葵祭）

賀茂祭（葵祭）

京都三大祭の一つである賀茂祭は、平安朝の優美な古典行列が見おどすが、その祭儀に関わる全ての人たち、また社殿の御・牛車に至るまでフタバアイオイをカツラの小枝に挿し飾ることから、広く一般には葵祭として知られる祭です。下鴨神社と上賀茂神社の例祭として、毎年5月15日に行われ、上賀茂神社では、毎年1万4千本ものフタバアイオイの葉を葵祭で使用しています。



葵プロジェクト

葵祭を飾られるフタバアイオイの目生地や個体数が激減していたことから、上賀茂神社では「特定非営利活動法人葵プロジェクト」を立ち上げ、フタバアイオイの保護・育成を行い、上賀茂神社に「葵の森」を再生する活動に取り組んでいます。葵の森を再生するため、「葵再生プロジェクト」を用意し、小学校などの教育機関や企業、団体・個人の皆様と連携した葵の育成を展開しています。

また、上賀茂神社から神山⁵にかけこの森を、かつての「古の森」として再生（希少な和の花が生いじ、日本古来の昆虫等が生息する森の復活）することを目指しています。

当プロジェクトの活動を通り出会う皆様には、古から日本人が大切にしてきたものは何かを考へ、日本の自然・文化・伝統を正しく理解し、誇りをもって次の世代へ伝承していただきたいと思っております。この伝承が永遠に続いていくこと。これが葵プロジェクトの目標です。



東本願寺と環境を考える市民プロジェクト

東本願寺は、環境問題に取り組むNPOの方々と共に「東本願寺と環境を考える市民プロジェクト」を二〇〇四（平成十六）年に発足されました。市街地の中にもあった緑地環境をもった渉成園、琵琶湖疏水から引水している東本願寺のお堀（現在は止水）など、歴史・文化遺産である東本願寺の環境をいかに活動を行っています。自然観察会やお堀調査などを定期的に実施しています。

このような活動を通じて、地域の皆様と共に環境や自然について考えるきっかけとなり、更には地域と一体となったまちづくりに取り組んでいます。

生きものの探検隊

渉成園や境内で自然観察会を行う生きものの探検隊では、京都精華大学教授の板倉先生が生きものの解説をしてください。



お堀探検

琵琶湖疏水を引いているお堀（現在は止水）は、琵琶湖の生態系が影響した環境や、お堀清掃など、お堀での活動を通じて、環境問題を考えます。



専門家に聞く渉成園の魅力

都会に広がる生きものの庭園

京都駅から一キロメートル圏内にこの庭園があることを御存知でしょうか。この渉成園では、毎週土曜日の8月に訪れた数時間の観察会で、大連のトンボが観察できます。季節によって観察は変わりますが、蝶の蝶にひらひら飛ぶトンボのチョウトンボにトンボと混ざり合っている仲間たちや、ヤンコ科のキヤンコやオオの様に体が細いトンボのトンボが数多く飛び交います。これ以外の生物相も豊富で、水面を飛翔するトンボが徐々に減り、水面下にはホタルの幼虫が産みつけられる力トンボが産みつけられています。初夏には、気持ちはよそよそに日光浴するニホンズツバメや、観察に頭を悩ませるアサギが目に見えたりします。

都会の真ん中に広がる大きな庭園には、昔から京都ならではの生態系が形成されており、これら生きものの気配は訪れる人の心を癒してくれます。

お話を伺いました
専門家



関 橋 太 郎 氏
京都水産部副部長

再生した葵晴らうとオトナ

京都市民にとって「渉成園」は、別名「葵庭園」のほろがなじみ深いのは知られていますが、「葵庭園」とは、カタチというみかんの植物の葉を、アサギというの幼虫の食草になります。カタチのある庭園には、たくさんのお蝶がやってくるのです。

十数年前、荒れ果てた庭園の風景に、若い園業者から相談を受けたことをきっかけに、筆者の関わりが始まりました。本園の水道が引かれていた池は、アサギの食草とアサギの葉が、外葉が繁茂し、水も繁茂し、庭にはヤンコやオオの葉が繁茂し、庭には散在してしまっています。池の浄化作業として、葵の葉のために園内には、水から葉を作り、池に水を入れたことなど、数々の思いがあります。

当園を所有する東本願寺とその関係者の皆様、このをめぐって、環境をめぐっては、単なるオトナとしての機能に加え、葵の葉を再生した葵の庭園として、花開いた庭園と見えます。例年、初夏には、周囲の土の明かりに、アサギの葉の光が、葵の葉を再生し、オトナになりました。

お話を伺いました
専門家



板倉 豊 氏
京都精華大学教授
京都自然観察会副部長
きょうと葵プロジェクト
京都府環境政策課

15 ムラサキシジミ



成虫の翅の裏は青紫色に輝き、裏面は枯葉のような模様を持つシジミチョウで、成虫は越冬します。幼虫は主にシイ・カンジの葉を食べます。

10 タラヨウ



常緑広葉樹で、葉は厚く、秋によく目立つ赤い実をつけます。葉の裏面を傷つけるとその部分が黒くなり実が重くなります。ハガキ(葉巻)の虫頭になったとも言われています。

11 サトキマダラヒカゲ



竹やぶやササ類の生えた雑木林を活発に飛び回る褐色の蝶です。成虫は樹液によく集まり、幼虫はササ、タケ類の葉を食べます。

16 キリ



生長が早く、材質は堅く変形が少なく遠くを運ぶなどといった特徴から、国内で採れる良質な木材として重宝されてきました。古くから船造り、家具、箱・器・器材として、また夢や神楽面の材料にもなることから伝統的に神聖な木とみなされています。

12 ハギ



落葉低木で、秋の七草の一つです。花は薄紅色などの蝶形で、7月から10月に咲きます。秋の彼岸の時期に咲くことから、お供えの「御萩」の語源になったとも言われています。

13 イチイガシ



常緑広葉樹で、葉の裏には密毛があり黄褐色をしています。実は食べることができ、カシ類の中で最も材質が優れていることから「一位樹」となりました。よく燃える特徴から「一火種」という説もあります。

17 ツガ



常緑針葉樹の高木です。トガとも呼ばれ、主に山地に生えますが、モミとともに神社では植栽されることが多い木です。材は良質で、建材、船舶材、楽器などに利用されます。

18 ナラタケモドキ



主に広葉樹の枯れ木や切り株、倒った木の根の傍などに生えて生えているキノコです。

キノコ類の役割

キノコ類は、枯れた植物や動物の死骸などの有機物を分解して無機物へ還元し、最終的に土へと戻す「自然生態系の命の循環」を支える重要な役割を担っています。

14 センチコゴネ



獣糞や動物の死骸に集まる黒いコガネムシで、上翅には細かな筋があります。メスは地中に埋めこんだ糞の中に産卵し、幼虫はその糞を食べて育ちます。

08 ハンミョウ



成虫は、全身が赤、青、緑に美しく輝く、脚の長い甲虫で、日当たりの良い地表面、ほかの昆虫を捕えて食べます。人が歩いて近づくと前方に少し飛んですぐに止まる様子が、道を教えているように見えることから、別名「道教え」とも呼ばれています。

09 エノキ



落葉広葉樹で、江戸時代には街道の一角の良い甲虫で、日当たりよく、土壌のよい木に、ほかの昆虫を捕えて食べます。人が歩いて近づくと前方に少し飛んですぐに止まる様子が、道を教えているように見えることから、別名「道教え」とも呼ばれています。

05 オニヤンマ



日本で一番大きなトンボで、幼虫の期間は長く3〜5年経度です。水のきれいな川や池の周辺や森林のはずれなど日陰の涼しい場所をすみとします。

04 ハゴロトンボ



黒く、細い翅を持ちヒラヒラと飛び回ります。オスの胸は金、緑色に輝き、メスは全身が黒く、平地や丘陵地の水生植物の生えた、緩やかに水が流れる環境を好みます。

03 イカル



くちばしは、太短いアブチョウ型で黄色く、エノキやムクノキなどの実をくわえてクルクル回し、外皮を剥ぎ除く様から、「豆回し」などの名でも呼ばれます。

06 フタハバオイ



詳細は8ページを御覧ください。

07 アオハト



肩から尾にかけて緑黄色、頭から胸にかけては黄色のハトで、主に地面に落ちたカシやシイの実を丸呑みにします。それらの木の枝で、休憩する姿を見ることができ



生きた森の神

01 トラツグミ



黄土色に黒い斑があるのが種名の由来で、海苔の樹林の地面でミミズなどを捕食します。平家物語の源氏物語の伝説ではないかと言われています。

02 スダジイ



常緑広葉樹で、葉は濃い緑色で硬く、5月から6月に淡黄色で長さ10cmほどの小さな穂状のような花を咲かせます。円錐型の堅果(ドングリ)は翌年の秋に熟し、生でも食べることができ、主に、地面に落ちた実を、鳥たちがついでに食べていきます。

つたバアオイについて

特徴

つたバアオイは、ウラボシ属の多年草（複数年にわたって生育し続ける植物）です。二葉で茎の先に二葉に分かれて一枚つきます。花はその別れた中央に輪、頭を垂れて咲きます。

生育環境

つたバアオイは、山地のやや湿った明るい林床に這うように育ちます。澄んだきれいな水と水はけの良い土壌環境を好みます。



4月頃に薄紫色の花を咲かせます。

生物多様性保全のために

ツタロシエイトでは、京都市生物多様性について連携した取組を進めています。生物多様性（遺伝子の多様性）保全の観点から、上賀茂神社に自主していたつたバアオイを用いて保護・育成に取り組んでいます。

葵育成プログラム

葵プロジェクトでは、小学校を中心とした教育機関や企業・団体・個人の皆様に育て親となつていただき、葵を育てるプロジェクトを用意しています。

シカ等の食害や異常気象等による絶滅を回避するため、上賀茂神社での育成に加え、外部での育成を行うものです。

植物を育てた経験のない方でも安心して育成に御参加いただけるよう、「育成マニュアル」の提供や「担当者」の派遣・指導・相談対応を実施しています。

育てたつたバアオイの一部を返却いただき、小さなものは上賀茂神社の畑で育成し、使用可能な大きさに育ったものは警察に活用しますことで、日本の代表的な祭事を支援していただくこととなります。



育成後、上賀茂神社に返却されたつたバアオイ

葵プロジェクトの取組について

京都市・京都水族館との連携

平成二十七年七月には、葵プロジェクトが取り組む教育事業と連携し、京都市生物多様性プロジェクトのリーディング事業の一環として京都市が実施する「地域生きもの探偵団（※）」を、上賀茂神社を流れる「ならの小川」で開催し、上賀茂小学校の児童が生物調査を行いました。

調査には、京都水族館から専門家を招き、児童たちが地域の自然環境を学び、またとなり機会となりました。



ならの小川

京都水族館では、京都市が策定した「京都市生物多様性プロジェクト」の趣旨を踏まえ、京都市内の川の生物調査や自然観察会などを開催して京都市の生物多様性保全を図るため、京都市と連携して活動に協力しています。

「ならの小川」は、美しい水が絶え間なく流れる、いろいろな生き物が確認されました。今回は調査こそまだまだですが、以前行った目撃観察では、ヤリタナコやカワナ、ムサツグなどの魚類も多数確認されました。今回、採集されたドンコやカラダツグなども、は格が良くこの川には餌となる小動物も豊富であることが分かります。身近でも豊かな自然が残る貴重な場所となります。

下村美氏
京都水族館長

「ならの小川」の生きもの



京都水族館

カワニナ
Kawamina

ならの小川には、ホタルの生息に適する環境があり、初夏には多くのホタルが飛び交い、夏の訪れを感ぜさせてくれます。あまり知られていませんが、幼虫は水中生活をするイモムシのような姿をしています。その幼虫の餌となるのがカワニナで、3〜4cmの大きさで流れのそれはと速くない場所です。春と秋に小さな子貝を産みます。

カワムツ
Kawamutsu

コイの仲間（川の上流域から中流域にかけて生活します。大きさは10〜20cmほどで、オスは繁殖期になると婚姻色と呼ばれる色を腹面に出します。雑食ですが、動物食の傾向が強く、流れてくる生きものなど口に入るものは、とりかえず興味を示します。

ドンコ
Donko

ハゼの仲間（一生を流れる緩やかな淡水域で生活し、大きなものでは25cmほどになります。口が大きく唇が厚く、この口で魚や甲殻類を丸呑みにします。オスは卵が孵化するまで保護します。



教育事業・文化事業

葵プロジェクトでは、小学校と連携し、児童にもつたバアオイの育成を支援しています。また、つたバアオイの育成を通じて、歴史・文化・伝統の理解と継承を目指した講義にも協力しています。



葵使

江戸時代、徳川家康公の命により毎年春になると、上賀茂神社の境内に自主してつたバアオイを静岡・駿府城へ献上しており、その役目を持つ者を葵使といいました。つたバアオイは、徳川家の家紋（三つ葉葵）のモチーフとして使われています。

この葵使を、地元等の関係者の皆様の協力を得て、平成二十年から復活させ、毎年春に再現しています。





制作協力(敬称略, 五十音順)

板倉 豊(京都精華大学教授)

賀茂別雷神社(上賀茂神社)・特定非営利活動法人葵プロジェクト

河合 嗣生(環境カウンセラー)

京都水族館

公益財団法人京都市都市緑化協会

真宗大谷派(東本願寺)

西台 律子(日本鳥学会員)

発行：京都市環境政策局環境企画部環境管理課

平成27年12月発行

京都市印刷物第273110号

この印刷物は再生紙を使用しています。

この印刷物が不要になれば
「雑がみ」として古紙回収等へ！

